

8 / 2 『再び、喜べ』（ピリピ 4 : 1 ~ 5）

長谷川望牧師

- * ピリピ人への手紙の内容の一つに教会内における一致の勧めがあった。しかし、ユーオデアとストケという 2 人の女性に対立し、放置しておけない状態であった。パウロは 2 人に主にあって一致しなさいと勧告し、他の人たちにも協力するように願う。二人はそれぞれが宣教に関しては大変熱心で、パウロに良く協力していたらしい。今の教会においても熱心に奉仕をする者ほどお互いに対立しやすいという事実がある。謙虚な心が求められる。
- * 「いつも主にあって喜びなさい。」（ピリピ 4 : 4）再び「喜びなさい。」
楽しい時、嬉しい時喜ぶのは当然である。しかし、「いつも」とは、悲しい時、苦しい時、怒りの時でも喜べと言っているのだろうか。そうではなく、「いつも喜ぶ」ことは通常の感情の次元ではなく、それを超えたクリスチャン生活のベースとなる事柄である。
- * 「いつも喜ぶ」ことは、「主にあって」初めてできることである。「主にあって」とは、非常に強いイエス・キリストとの絆を表わしている。「キリストと一体」という意味である。なぜなら、主イエスを信じる者はイエスのものになるからである。イエス・キリストを信じる信仰によって喜ぶのである。罪が赦され永遠のいのちが与えられている恵みは最大の喜びである。「主は近いのです。」（4 : 5）と言う。これは、主イエスが再び来られる日が近い、ということと、主イエスはいつも私の近くにおられるという意味がある。
- * 主イエスに信頼している限りイエスは私たちにいつも最善を成してくださる。神にとっての最善が私たちにはその時は最善と思えないこともあるが、最後にはすべての事を益としてくださると約束されている。神の最善が私たちの最善であることを信じ、神のみこころを常に求めて生きるところに「いつも喜ぶ」秘訣がある。